カトリック札幌教区ニュース
Catholic Sapporo Diocese News

No. 47
2024年11月

発行：カトリック札幌司教区事務局広報部　〒060-0031 札幌市中央区北1条東6丁目10 Tel.011-241-2785 https://www.csd.or.jp

菊地大司教、枢機卿に指名される

©カトリック東京大司教区

教皇フランシスコは、10月6日正午、バチカン・サンピエトロ広場に集まった巡礼者や訪問者に向けての「お告げの祈り」を祈る際、バチカンにて行われる12月8日の枢機卿会議において、21人の枢機卿を親任することを発表しました。アジアからはフィリピン、インドネシア、インドに続き日本からも菊地功大司教（東京教区）を含め4名が選ばれ、日本人としては、2018年に選ばれた前田万葉枢機卿に次いで、7人目の枢機卿となります。これで枢機卿の総数は256名となる予定です。（教皇選挙の投票権を持つ枢機卿はこのうちの141名となる見込み。）

通常聖年開幕ミサ

教皇フランシスコは大勅書『希望は欺かない』で世界の教会に次のように示されました。

2025年の通常聖年（25年に1度）は2024年12月24日にバチカンのサンピエトロ大聖堂の聖なる扉の開門に続き、3大バジリカの門が開かれ、翌年12月28日に閉じられます。すべての司教座聖堂でも教区司教は、12月29日の聖家族の祝日に司教座聖堂において儀式書に従い行列と洗礼を記念する祭儀、および感謝の祭儀をささげるよう定められました。札幌教区でも聖家族の祝日である12月29日に、司教座聖堂（北一条教会）にて10時より感謝の祭儀および開門の為の典礼を行う事となりましたのでお知らせいたします。なお、詳しいことは後日別紙にてお知らせいたします。

函館・カトリック元町教会(無原罪の聖母教会)の今後について

国内外の観光客が年間数万人も訪れる函館・カトリック元町教会。古くから函館市民にも愛され続けてきた歴史ある教会は今、「巡礼地教会」として生まれ変わろうとしている。そのいきさつと今後の展望について主任司祭の祐川郁生神父に聞く。

函館のカトリック元町教会は日本において最も古い歴史を誇ります。1859年にパリ外国宣教会のメルメ・カッション神父が日本の再宣教のために函館に基礎を作りました。函館では何度も大火が起こり、その度に聖堂を焼失しました。現在の教会堂は1907年の大火の後、1910年（明治43年）に建立されたゴシック式、レンガ造りの聖堂が1921年（大正10年）の火災で半焼した状態から、土台や壁、ステンドグラスなどはそのまま使用して改築されたものです。1924年に現在の教会堂が新しく鐘楼を増築して完成しました。幾多の火災で函館教区のカテドラルとして使用していた聖堂焼失に挫けることなく、諸外国を回り、資金調達をしてこられたベルリオーズ司教の苦労に応えて、当時の教皇ベネディクト15世から祭壇や聖像、十字架の道行きなどが贈られました。それらは芸術的にも非常に価値のあるもので、訪れる人たちに深い印象を与えるものです。函館市の観光案内にも「元町教会の内装」は必見と書かれています。

また、1613年の禁教令の実施以降、最初の洗礼式が元町教会で行われています。元町教会の洗礼台帳のNo.1には、「ジョセフ・マリー・ゼンベー」(Josephus Maria Zembei)と記されており、ムニクー神父によって洗礼式が行われました。このニュースはプチジャン神父によってパリに伝えられ、信仰弘布会の『ミッション・カトリック』誌を介して「かつて多くの伝道者、殉教者を出したこの国で3世紀近くを経た後に初の洗礼が執り行われた」と全世界に報じられています（函館カトリック元町教会調査報告書41頁）。

第二次世界大戦後、いっきに信徒数が増えましたが、現在は信徒数も激減しています。この歴史と伝統のある教会堂を今後どのように保存していくかということが課題となっています。今年、3月31日、函館カトリック元町教会調査研究委員会編の『函館カトリック元町教会調査報告書』が発行されました。三宅理一氏を中心とする研究調査委員が9年の歳月をかけて作られたもので、274頁にもわたる多方面からの研究調査書となっています。

今後、元町教会は「巡礼地教会」としての道を歩むべく、明治時代にベルリオーズ司教が作ったルルドへの道を開くために、長年信徒会館として使用してきたマリア会館を取り壊しました。今後は、千軒岳殉教者の資料や元町教会の歴史などの資料館、売店などの整備をして、未来につなげていく計画です。国内外の観光客が年間数万人も訪れる教会なので、宣教のチャンスと捉えて計画を進めていく予定です。

（カトリック元町教会主任司祭・祐川郁生）

着々と工事が進む
カトリック元町教会

北海道各地区カトリック大会

～信仰と共同体の絆を深める集い～

■旭川地区

7月28日の主日ミサ後に旭川五条教会にて行われた西村桃子氏（セルヴィ・エヴァンジェリー所属宣教師、シノドス教皇任命議長代理）の講演会「わたしたちのシノドス」から、9月15日に旭川藤星高等学校の講堂にて行われた「霊における会話」による分かち合いと体育館にての「司教ミサ」までを大会期間として、第68回旭川地区カトリック大会は開催されました。

西村氏の講演会では昨年のシノドス第一会期や、そこに至るまでの大陸ステージの様子を聞き、質疑応答の時間では信徒の素朴な疑問に答えてくれたり、アルゼンチンのマテ茶をめぐる教皇との微笑ましいやり取りの様子を聞かせてくれたりしました。午後は希望者が参加して「霊における会話」を西村氏に指導してもらいながら体験しました。

大会期間中は地区信徒が心を合わせて「2024年旭川地区カトリック大会の祈り」を毎日19時に祈りました。

そして大会最終日、5年振りに一堂に会することができた私たちは、大会テーマである「主の望まれる共同体へ～教会の未来のために～」について「霊における会話」による分かち合いを行いました。ここには10月14日開催の「札幌教区のシノドスのつどい」実行委員会から2名、Sr松宮るみ子氏と北一条教会所属のジョン・ミジ氏が応援に駆けつけてくれました。

この大会を通して地区信徒の皆さんに、「シノドスのあゆみ」を身近に感じてもらい、「霊における会話」の体験を通して、その可能性と「共同識別」の大切さを感じてもらうことができたらと願いました。そして、ある程度予想はしていたことですが、司教ミサ参加者数が五年前（約350名）の半数となり、コロナ禍による5年のブランク後の現状を突き付けられた形です。来年以降の地区大会の在り方を問われるものとなりました。この大会の様子はユーチューブチャンネル「カトリック旭川地区宣司評」にて視聴できます。どうぞご覧ください。（旭川地区宣司評　評議員代表　荒木関充）

■函館地区

コロナ騒ぎでやむなく中止となっていた「函館地区カトリック大会」が4年ぶりに8月25日に宮前町教会で開催され約200人の方が参加されました。

今回は「堅信式」も同時に行なわれることもあり、大会は会長による「堅信の秘跡は洗礼・叙階とともに一生に一度しか受けられない大切なものです」というあいさつに始まり、勝谷司教による「講話」に続き「堅信式」が厳かに執り行われ12名の方があらためて信仰を堅く誓われました。

その後、日本語勉強中のフィリピンから来られたビクニー神父を交え祐川・アンセルモ神父三人による共同司式のミサが執り行われました。

司教は講話の中で「シノドスはまだ終わっていません。これからも皆の心を一つにするとともに広く他者との対話に努めるように。先日ある教会のミ

サでベトナムやフィリピンから来られた方が、自国語で書簡や共同祈願を唱えておられるのをみて感激しました」とお話しされていました。

諸式の終了後はお弁当を囲んでの「祝賀懇親会」が約130名強の参加で行われました。祐川神父の名司会ぶりもあって、韓先生のギター伴奏によるラ・サール高校生3人の美しいコーラスや、当日参加できなかったベトナム人の代表としての女性によるアカペラでの歌声なども飛び出し、和やかなひと時を過ごすことが出来ました。特にこの方の「2年後には帰国して日本語の先生になりたい」との発言には思わず「頑張れ！」との拍手をしてしまいました。これもシノドスのひとつなのかも知れません。

今後は私ども信者のみの大会ではなく、何らかの方法で、できれば未信者の方も巻き込んだものになれば良いなと思っています。（函館地区宣教司牧評議会　会長　大嶋好洋）

■北見地区

8月25日（日）、北見教会において北見地区カトリック大会が開催されました。10時より内藤神父様の司式により合同ミサが行われ、参加者は、北見、網走、美幌、紋別教会より総勢64名。このうち紋別・美幌・北見からベトナム籍の青年たち15名が参加しました。一部の朗読、共同祈願、あわれみの賛歌、主の祈り等をベトナム語で行いました。参加人数が多く、国際色豊かな賑やかなミサとなりました。

ミサ後は、全体で記念写真を撮り、その後シノドス研修を行いました。この研修のために、札幌教区シノドス・チームの荒木関充さん（旭川）、Sr宮崎妙子（札幌）、札幌教区のシノドスのつどい実行委員会より西田淳子（あつこ）さん（月寒）、森朝美さん（小樽）が来北してくださいました。

シノドス研修の「霊における会話」とは、どのようなものか実際に体験を通して学ぶものでした。5人ずつのグループを作り、3つのステップを踏みながら、「わたしが神様から与えられたもの」というテーマに基づき、分かち合いを行いました。

どのステップでも、共通点は、沈黙の時間を持ち、心に浮かんだことを大切にするということです。また、他の人に話をひたすら聞くという傾聴することの大切さを学びました。最初は、3分話すのは長いのではないかと思いましたが、実際やってみるとすぐに時間は経ってしまいました。また、他の方の話に自分と共通することも多く、傾聴することで自分の考えを深めることができました。他我を超えた共同体に働く何か、心が導く？とも言えるような方向性を知る機会になりました。

研修の後は、調理したパエリアに加え、有志の方の差し入れのコーヒーゼリー、漬物、ミニトマトで豪華な昼食をいただきました。食事をしながら信者同士の交流も活発に図ることができました。（北見教会・笹原和広）

■札幌地区

札幌地区使徒職大会が10月6日（日）藤女子大学で開催され、約380名が集まりました。大会テーマは「キリストとの出会い」です。今回は初めての試みとして画像配信も行われました。

日本カトリック典礼委員会の宮越俊光さんを講師に招き、「典礼はキリストとの出会い」と題する講話をいただきました。典礼憲章や第二バチカン公会議の成果及び聖書の言葉を通して典礼に現存するキリストを説明し、キリストはそこにいて私たちを待っているので、私たちは生きているキリストと出会う。その期待とわくわく感を持ってミサに参加しているか。キリストを迎えるためにはどうすれば良いのかについて説きました。

ミサでキリストに出会う。そのために心の準備が必要です。当日の福音書は事前に読んでおく。福音朗読の時は手元の文字を追うのではなく神の生の言葉を聴く、ミサが終わった時には、始まった時の自分よりも生き生きとしたキリスト者となるように。

講演の後は小グループに分かれて分かち合いです。大会のしおりに予めグループの番号を振ってあったので、初めて会う人が多かったですが、一時間程度それぞれのキリストとの出会いを中心に分かち合いました。

午後からは、勝谷司教司式のミサで、参加者は現存するキリストを意識して与りました。ミサの中で合同堅信式がありました。（山鼻教会・能町浄彦）

平和の元后 カトリック砂川教会　献堂75周年

9月29日（日）、砂川教会は献堂75周年と、ナルチゾ神父、マンフレード神父、ルカ神父の司祭叙階60周年のダイヤモンド祝を迎え、感謝のミサを捧げました。ベルナルド勝谷太治司教はじめ170名の信徒が参加し、その後祝賀会が行われました。

ナルチゾ神父、ルカ神父ゆかりの帯広からは大型バスで30名が参加、そのうち一人の青年は心に沁みるバイオリン演奏を披露してくれました。

砂川教会は1949年（昭和24年）、ヤヌワリオ神父によって建てられ、それ以来主にドイツの神父、10年前からは11代目としてイタリア出身のナルチゾ神父によって司牧され、毎朝ミサが捧げられています。ヤヌワリオ神父の手記によりますと、当初は自転車で上砂川や歌志内、滝川方面を何時間も、また夜中までもかかって巡回されたそうです。洗礼を授けた信者の総数は617名です。

なお、砂川天使幼稚園も創立75周年を迎え、卒園児総数は8，258名です。

ダイヤモンド祝のナルチゾ神父、ルカ神父はイタリアで、マンフレード神父はドイツで1964年に叙階され、数年のうちに来日し、北海道の私たちのために生涯を捧げてくださっています。

ミサと祝賀会の運営には、滝川と美唄教会から多大な協力をいただき、心より感謝いたします。

（砂川教会信徒代表　高塚紀子）

【平和祈祷集会】日本聖公会札幌教会

【平和講演会】谷大二司教

【平和講演会】
翌９月１日は札幌護国神社内の沖縄戦慰霊碑の前で花を捧げ祈った。北海道出身のすべての戦没者の名が石碑に刻まれている。

【平和と共生を考える札幌集会】
朴美愛講師

【平和祈祷集会】平和行進（大通公園）

【平和講演会】

2024平和旬間
＠カトリック札幌司教区

【8月31日】札幌平和祈祷集会

例年、８月15日には、プロテスタントの方々が午後６時から平和祈祷集会をもち、その後、大通り公園まで平和行進、カトリックは、北一条教会での平和祈願ミサの後、平和行進して大通り公園で合流するかたちでやってきました。しかし今年は、札幌教区にエキュメニカル委員会が発足して、プロテスタントの方々との連携をより強めることができ、講演者に名古屋教区の松浦悟郎司教をお呼びすることになりました。そこで北一条教会でのミサを１時間早めていただき、ごミサの参加者も、平和祈祷集会での松浦司教の講演を聴けるよう、調整をお願いいたしました。そのため、札幌地区の皆さま、司祭のみなさまにはご迷惑をおかけしましたことをお詫び申し上げます。

しかし、おかげさまで、会場の日本聖公会・札幌教会には、１２０名もの参加をいただき、オンライン参加者も40名になりました。松浦司教は、『「非暴力による平和への確信」と「ゆらぎ」～いま聞こえる戦争の足音の中で～』と題して、日本が軍事大国化しようとしている現在、フランシスコ教皇の「戦争が橋を壊すのではない。橋が壊れたところに戦争が起こる」という言葉を引用しつつ、「一粒の涙、一つの祈りを、そして声をあげ、歩く」ことを訴えられました。平和行進も司教とともに行い、よい交流ができたことを感謝しております。

【9月1日】９・１を忘れない！ 平和と共生を考える札幌集会

今から１０１年前の１９２３年９月１日、関東大震災の混乱のさなか、多くの朝鮮人や中国人、また、日本語を上手にしゃべれない障がい者、政府に反対する労働者や社会主義者が、無理やり捕らえられ、虐殺されました。

昨年はちょうど百周年でしたので、多くの行事がありましたが、少しでも自分と違う人たちへのヘイトスピーチや、いじめが増えつつある現在、９月１日に起きたことを語り継いでいこうと、同じような活動をされてきたプロテスタントの方々と協同で、この集会を今年から始めることにしました。

当日は、朴　美愛（パク・ミエ）牧師（酪農学園宗教主事）に、韓国人の立場からお話を伺い、私は、そのような事件が起きた要因は、１８６９年、明治政府による「蝦夷地」の植民地化に始まっており、この北海道とも無縁ではないことをお話ししました。朴さんは、「忘れない」ためには、「まず事実を知る」ことが大事であり、そのうえに立って、ただ相手を非難するのではなく、いかに理解し、共生していくかを、イエスさまの教えに従いながら、実践していくことの大切さを訴えられました。

会場のカトリックセンターには、教派を超えて40名以上の参加者があり、今後もまた、続けていきたいと話し合いました。（上段記事共に札幌教区エキュメニカル委員会代表・小野有五）

【8月31日】平和講演会

８月31日、沖縄から谷大二名誉司教を迎え、教区カトリックセンターで平和講演会が開催されました。テーマは沖縄の軍拡で、「北海道と沖縄―進む軍拡の中で考える―」。これは沖縄だけの問題ではないと認識させられました。

沖縄戦は本土決戦を遅らせるための捨て石作戦とされ、20万人以上が犠牲となり、その中には１０，８０６人の北海道出身者も含まれます。戦没者の遺骨収集が始まったばかりの中、辺野古新基地建設の埋め立て用に南部の土砂を使用する計画があり、全国２３０の自治体が意見書を提出しています。

沖縄は１８７９年の琉球併合以降、日本の植民地となり、戦後は米国の軍事植民地とされました。米軍基地が集中し、事件事故が絶えない中、不平等な「地位協定」により日本の法律に基づく捜査ができません。また、辺野古新基地建設に関する問題から「地方自治法」の危機が懸念されています。

安保３文書により、日本は南西諸島の軍事基地強化を進め、小さな島々にミサイル基地を配備し、自衛官を増員しています。全国にも火薬庫が整備され、北海道には11の火薬庫が配備される計画です。政府は軍拡ではなく、外交努力で平和条約を作るべきだと訴えています。

谷司教は「強者にとっては一度の負けが決定的だが、弱者にとっては負け続けることを止めた時が敗北なのだ」（金時鐘「在日のはざまで」）という言葉で講演を締めくくりました。主催・札幌教区正義と平和協議会。会場参加約50名、オンライン参加21ヶ所。（カトリック札幌教区正義と平和協議会・鳥居明子）

日本カトリック看護協会 第62回全国大会（札幌）

日本カトリック看護協会（JCNA）は2024年8月24日（土）25日（日）に札幌支部（佐藤昇子支部長）が担当し、第62回全国大会を行いました。テーマは「命へのいつくしみ・・カトリックナースの使命・・」。コロナの後、久しぶりの大会に全国より66名が参加しました。

教区の皆様にもJCNAの活動を知っていただきたいと思い、1日目の会場はカトリック北十一条教会（間野正孝主任司祭）で行いました。開会式の後、札幌教区長の勝谷太治司教に基調講演をお願いいたしました。司教司式共同ミサの後、天使大学に会場を移し、田畑邦治天使大学学長より教育講演、続いて社会福祉会の菅しおりさんと臨床パストラルケア協会の山下清美さんにより体験発表が行われました。2日目は体験発表等をもとにグループワークが行われました。

JCNAは1957年に創立されましたが、それに先立つ1951年に、札幌では天使病院のシスターなどを中心に活動は始まっていました。

昨年度の全道ベトナム青年大会に医療班として参加した出会いから、懇親会ではベトナムのカトリックの青年たちにダンスをお願いしました。祈りのダンスは札幌支部会員や会場の会員たちもともに踊り、和気藹々の雰囲気の中での、会員交流となりました。

参加者からは、「ただそこにいることの意味を考える機会となった」「不必要なことは何もないと実感した」「看護師として・信者として・人間として大切なことは共通していると分かち合いを通して感じた」「私にできることを地道に最後まで行ってゆきたい」などの声が聴かれました。大きな恵みにあふれ、新たな学びと力を感じた2日間でした。

（第62回JCNA全国大会
大会委員長・中村敦子）

フィリピンボランティア2024

この度、フィリピンボランティア2024を無事に終えることができましたことを、心より感謝申し上げます。本プロジェクトはカトリック札幌司教区の協賛のもと、ラ・サール会東アジア管区（LEAD）の支援をいただき、日本地区、特に函館ラ・サール共同体を中心に実施されました。参加者16名、引率者5名の計21名で、11日間の貴重な体験を共有することができました。新型コロナウイルスの影響により4年間延期され、準備も決して容易ではありませんでしたが、多くの方々のご協力をいただき、無事に帰国することができました。

滞在中は、異なる文化や背景を持つ参加者同士が協力し、互いの壁を乗り越えなければならない場面が多々ありました。フィリピン・ラ・サール会のブラザーやスタッフ、そして引率者の皆様のご支援のおかげで、このプロジェクトを無事に終えることができたと感じております。参加者たちは、言語や文化の違いを超え、互いを理解し合うことの大切さを学びました。また、ストリートチルドレンの社会復帰施設「KUYAセンター」や文化交流プログラムを通じて、「幸せとは何か？」「生きるとは何か？」と問いかけられる貴重な体験もありました。「出会った人に全力を尽くす。その後は神が良い方向へ導いてくださる」という信念を、この活動を通して改めて実感しました。

帰国後、参加者たちは、フィリピンで得た経験を、すでに学校や小教区で分かち合っていることと思います。また、小教区には「帰国報告集」を配布しておりますので是非ご覧になっていただければと思っております。最後に、この活動を支えてくださったすべての皆様に、心より感謝申し上げます。

（函館ラ・サール 韓 徳）

【教区司祭人事】10月1日付

●札幌地区
○札幌東ブロック
北広島・千歳・恵庭教会担当
・協力司祭 マテオ 李 源圭
（韓国・ソウル教区）
居住場所▼北広島教会
○札幌地区協力
・日本語研修 マセオ 奇 浩培
（韓国ソウル教区）居住場所▼
札幌教区カトリックセンター
●函館地区
○函館地区協力
・日本語研修 ハリコ・ビクニー
（フィリピン・キダパワン教区）
居住場所▼宮前町教会

どうぞよろしくお願いいたします

3人から教区の皆様へ心温まるメッセージが届きました

マテオ李源圭（イ・ウォンギュ）神父です。司祭叙階は1975年12月8日で、韓国ソウル教区所属です。2017年隠退して自由の身になったので、札幌教区での司祭不足を聞き、札幌教区を助けようと思いまいりました。長い間小教区の仕事をしていなかったので、少し不安になっていますが、神様のお恵みがあるので無事に司牧が出来ると思います。足りない面はたくさんありますが、皆さんの広い雅量で受け入れてくださいますよう願いながら、札幌教区での司牧活動をしたいと思います。どうぞ宜しくお願い致します。

マセオ奇浩培（キ・ホベ）神父です。韓国で長年暮らしてきた私にとって、神様が日本という国、特に北海道というところで何を望んでおられるのか悩みました。他の国、他の文化の中で神様がここに呼んでくれた理由がきっとあるはずなので、緊張しながらもドキドキする気持ちを持って準備しています。特に好きな食べ物は海産物。休日は運転をしながら音楽を聴くのが好きですが、残念ながらまだ日本の免許がないので部屋で音楽を聴いています。まだ日本語が上手ではないので、皆さんと話をするのは難しいですが、皆さんと嬉しい祈りの時間を持ちたいと思っています。私も毎日お祈りしますので、皆さんも私と一緒に祈ってくださることを願います。

ハリコ・ビクニー神父です。私は4人兄弟の2番目です。フィリピンのキダパワン市という小さな町の出身で、37歳です。司祭歴は、もうすぐ8年になります。小教区司祭、教区司祭として様々な小教区に赴任しました。最後の仕事は、神学校に常駐する神学生の霊的指導者でした。札幌教区は私の新しい家です。新米の私は、ベストでもスマートでもないかもしれませんが、人々の心にイエスをもたらすという皆様の志と一体になろうと努力しています。

ハラスメントのない教会共同体をめざして

～教会におけるハラスメント意識調査～

まとめ【総括編】

カトリック札幌司教区ハラスメント対応デスク
担当司祭　松村繁彦

前回までの教区ニュースで、札幌教区のハラスメント調査報告が終わりましたが、まとめの最後となる総括編では、その分析と社会学的見地からの考察と提案をお伝えしたいと思います。

(1) ハラスメントの定義

ハラスメントは「嫌がらせ」など「相手に不快を与える言動」によって起こります。自分の思いではなく、相手の主観による受け止めによって発生します。客観的な事実（常識的な業務命令、地域の習慣）があったとしても、そのアプローチの仕方によっては、ハラスメントは起こり得ることがあります。つまり、受け手による傷つきがハラスメントのスタートになることを肝に銘じておく必要があります。

(2) なぜハラスメントが起きるのか

ハラスメントの原因を確認してみましょう。あらゆるハラスメントは、2種類の関係性を土台として行われているように感じます。

① 変えられない事実

性別・年別・国籍などの事実にもとづく価値観や文化・習慣・歴史により、日本文化の中で固定化されたルールとして、悪気なく行われるものです。代えられない事実を根拠に、相手を指摘（無意識の攻撃）することは、避けられない痛みとなります。

② 個人の倫理観

育った環境や変化する体験、家族構成・経済・地位・学歴・性格・疾病・障がいなどによるものです。本人にとっては重要な深い体験を、他者が簡単に指摘（無意識の攻撃）することは、大きな痛みを与えます。このような無意識の攻撃は、自分が知らないこと・知り得ないこと・気づかないことに対し、自分が踏み込んだ対応により、知らないうちに人間関係を壊す行為となります。もし最初から知っていたなら、また良い関係を構築できていたら、そして深い交わりの中で生きていたら、信頼関係の内に避けられたのかもしれません。

(3) 日本の社会と教会におけるハラスメント

ここでは、日本の社会と教会におけるハラスメントの起こり得る文化的背景と男女別の考察を説明します。

第二次世界大戦後の復興時、戦争という苦難を乗り越えた人々は社会の復興に一丸となって向き合ってきました。「仕事第一」「24時間働けますか」など、企業戦士と共に働くことが日本の成長であり、日本経済社会への貢献であるとされました。犠牲をいとわず家族を顧みず働いた方々もいたかもしれません。育児は女性に任せていた時代もあったかもしれませんが、そのおかげで今の日本があることは間違いありません。そして当時それを支えてきたのは家や子どもを守るお母さんたち、すなわち専業主婦の存在でした。役割が明確に分かれており、大黒柱とそれを支える家族という関係が昭和の時代を進んできた家庭・社会環境であったと言えます。その関係は教会での活発な動きに連動していきました。教会活動の中で最も強かったのは婦人会であったというのは、日本全国の教会の現状を見ても明らかです。それは教会活動に割く時間の割合が、女性には多かったからです。このように信仰の伝達は女性の数に比例していきました。専業主婦の存在が減ってきたという事が、新しい教会の歩みを振り返る為に欠かせない視点です。

その時代は現代とは違い発展途上の日本の教会の歩みの中で、内部に向けて力を蓄え、教会は多くの課題に向き合うよりも、教会員が家族のようになり、元気になるため、信仰を深める時間に重点がおかれていました。しかし現代は多様な課題が私たちに与えられています。特に「いのち」「人権」に向けた社会的な動きがあり、日本のキリスト教研究の発展に伴い、振り返るべき「典礼」「歴史」「聖書」「教会制度」など、新たな課題も出てきており、教会は祈り、働き、考えるのに忙しくなりました。次から次にやって来る課題に、だんだんゆとりがなく、配慮するのに疲れが生じてきました。教会の能力的キャパオーバーというのが適切ではないでしょうか。

そんな中、「昔の教会の方が教会らしかった」という声も聞こえますが、いつの時代も教会は福音宣教を中心に据え置いてきたので、比較はできません。また現代は更にひとり一人が「考える時代」です。しかしノスタルジーに溺れてしまうキリスト者は思考停止となり、今ある頭の中の器だけで対応するようになり、それを超えることにより自然に自己本性が表れ始める。すなわち限界を迎えると、思考停止し開き直ってしまうのです。「自分にとっての当たり前」「自分の思うこと」「言いたいこと」を言う。もちろん嘘は良くない事ですが、それは楽

な対応です。そこに向けた「欲求が抑えられない」。それを否定されることに許せなくなり、他者を優先できず「自己本位な動き方」などが起こります。結果、違う文化環境で育った人は、口に出して反論できない傷ついた他者が生まれ、泣き寝入りの中で過ごす人が生まれます。

今の社会は性別に関係なく、全ての人が働かなければ生きていけない時代に入り、子どもたちは教会よりも学校を優先しなければならなくなり、青年たちは自立した生活のために働かなければなりません。人々は教会の外で生きる時間が増えました。それはある意味教会人が社会の中に溶け込んでいったともいえるかもしれません。

しかし教会に残された人は新しい風が入らず、今まで教会に来続けてきた人たちは世代交代できず主流となっています。時代とともに変わりゆく教会は、新しい風が入らない中で発展を目指さなければなりません。しかし、同じ人が活躍せざるを得ない状況は、かつての教会文化がそのまま維持継続せざるを得ない環境を残し続けていいます。

(4) 教会からハラスメントは無くなるか

答えは残念ながらNO、つまり現段階のままでは無くならないでしょう。

今回のハラスメント調査を見ると、信徒も修道者も司祭も今までの教会の流れのまま、気が付くと加害者（すでに加害者になっている人もいる）となり、被害者が訴えて初めて驚くことが明らかとなりました。どのように乗り越えたらよいのでしょうか。

まず、「自分はハラスメントを行っているかも？」という反省の土台が要求されます。これは自己否定ほどではないが、自分と向き合う作業であり、かなりきつい振り返りです。そのためにも過去ではなく今を見ること、変えられない現実と向き合うこと、事実からスタートすること、自分以外の価値観に目を向けること、自分を変える事に挑戦すること、自分の価値観をシビアに振り返ること、新しい風を受け入れ理解することが求められます。教会は分かち合い（シノドスを含む）など素晴らしい方法を持ち合わせていますが、その場と日常は必ずしも一致しないという弱さを人は持ち合わせています。信仰と生活の遊離と同じなのです。だから余程の回心に向かう姿勢が求められています。

(5) 打開策はあるのか

解決はかなり難しいですが、考えていかなければなりません。これは私たちにとって大きな課題です。前提として、適切な人間関係とコミュニケーションがあれば、多くは解決するでしょうが、一旦崩れてしまうと転がり落ちるように関係性は壊れます。そこで打開策に向けて数点指摘します。

① 聖職者中心主義を正確にひも解く

聖職者中心主義は便利なシステムですが、責任がすべての人にあるという自覚が必要です。しかもその責任は同等にあります。権利と義務は教会内において誰もが持ちうるものであることに気づかなければなりません。聖職者の役割、修道者や信徒の役割はそれぞれ明確に分かれています。しかしかけがえのない一人の人間であるという役割はすべての人にあること、これが愛のおきてに基づいて見直されなければなりません。

② 「普通」とは何かを考える

「普通のこと」が通用していないことに気づく必要があります。「普通」ということは「あなたの普通」であり、「みんなの普通」「教会の普通」とは違います。普通を語る場合、「間違ったあり方」であり、「自分は間違っているのかもしれない」という視点が前提になければ、気づくことすらないし、ハラスメントは一生なくなりません。

③ 何よりも他者を尊重する

他者に対する尊敬と、相手が望むかかわり方を考えるという歩みが無ければ、ハラスメントはなくなりません。また、その関わり方も時代とともに変わっていることを受け入れなければなりません。TPO（時・場所・状況）が変わるとその都度変化するものであり、つねにリセットしなければなりません。

④ 表現方法を見直す

たとえ相手が間違っていたとしても、それに対するかかわり方、修正の仕方はあります。教会は民主主義ではないので、少数が間違っているとは限らないことも重要です。その認識がずれるとハラスメントが起きます。コミュニケーション方法の感性を磨くことは大切です。自分の意見を通すことに専念することは論外です。

(6) 最後に

ハラスメントはあらゆる角度から起こり得ます。だから大切なことは、感情（特に怒り）や人との心理的距離感をどうコントロールできるかです。キリスト教的な対応は、シノドスでも大切にされている対話、特に聞くことと、誤解を生まないように尋ね合う事です。そして互いに信頼を裏切らない関係づくりこそが乗り越えるための課題です。具体的には伝えづらいが、日常のささやかな対話の積み重

ねを通して、自分を知ってもらい、相手を知っていく作業です。信徒と修道者と司祭という立場や役割は変えることができませんが、人と人との間では、たとえ立場があったとしても、主従関係ではなく兄弟姉妹の関係がそれらを乗り越えていけるはずです。本来、社会では作りづらいが、教会では最も適した環境のはずです。だからこそ教会から初めてハラスメントの無い社会を示していかなければなりません。逆に兄弟姉妹の関係を壊す態度が、ハラスメントを増長させるのです。

イエス・キリストは誰も涙する人を作りたくない。そう信じることで、自分発信ではなく常に他者を通して作る関係性によって神の国の実現を目指したのではないでしょうか。

「ハラスメントのない教会共同体をめざして～教会におけるハラスメント意識調査～（２０２３年実施）」について、３回のシリーズでお伝えしました。お伝えできたのはまだ一部にすぎません。今後、札幌司教区ハラスメント対応デスクが行う啓発訪問等を通して報告を継続し、ハラスメントのない教会共同体をめざして、皆様と共に分かち合い歩んで行きたいと思います。

子どもを守るために

カトリック札幌司教区ハラスメント対応デスク
事務局　西　千津

子どもと接する仕事に就く人の性犯罪歴を雇用主側が確認する制度「日本版ＤＢＳ」を導入するための法律「こども性暴力防止法」ができる予定である。子どもの性被害を防止するため、雇用主の学校や保育所などに職員や就職希望者の照会を義務づけ、性犯罪歴がある人の就労を事実上、制限するものである。民間の施設（学習塾、学童保育など）も任意の認定制度の対象となり、認定を受けると確認義務が生じるが、子どもを預ける側にとっては安心材料となる。

今回のアンケート調査では、教会学校や侍者会における暴力の事例が報告されている。被害にあった子どもたちが教会から離れ、その状況を見て見ぬふりをする大人たちの姿がそこにあった。また、性虐待の事例も報告されているが、そもそも教会内の子どもへの性虐待がこれまでに訴えられているのに日本のカトリック教会では公に認められていないという事実にまず向き合うべきである。

子どものキャンプ活動も行っている北海道ＹＭＣＡでは、指導者が知っておくべき性被害・性加害に関わる基本的な知識を学ぶ研修を行っている。日本の司教団が「子どもへの性的虐待に関する司教メッセージ」を発表してから20年以上になるが、机上のメッセージで終わらないよう動き出すのは一人一人の意識である。

カトリック札幌司教区
ハラスメント対応デスク

080-2879-3168

火曜～金曜
12:00～16:00
祝日夏季冬季休業日除く

✉ sapporo.harassment desk@gmail.com

未成年者及び弱い立場におかれている成人への、性的事案を含む虐待や暴力については専任の「保護担当者」へ速やかにお繋ぎします。被害に遭われた方、目撃した方は左記ホットラインへ直ちにご連絡ください。
（保護担当者は非公開）

青年と祈りの集い in FMM

7月14日と15日の2日間、札幌教区青少年委員会主催の「青年との祈りの集い in FMM」が、FMM札幌修道院にて行われました。この2日間は、青年たちが「祈り」、お互いを知る「交流」が中心となっていて、部分参加もできる柔軟なプログラムでした。

14日の19時から、年間第15主日のミサを祝うために日本人とベトナム人の青年たち合わせて約20名が集まりました。ベトナム人の青年たちは、「青年会のユニフォーム」だというポロシャツを着用し、日本の社会で働きながら信仰によって支え合う仲間がいるという象徴のように感じました。その後は日本人の青年たちが、紙コップで思い思いにキャンドルホルダーを作り、テゼの歌をうたいながら祈りのときを過ごしました。ろうそくの灯りが紙コップをとおして柔らかな光と影のゆらぎとなり、祈りの時を演出していました。その後は、交流会。お仕事で忙しくて参加できない人が来てくれて、再会を喜んでいらっしゃいました。

翌朝は、6時半から修道院のシスターたちと朝の祈りをし、続いて3人の司祭の共同司式によるミサが捧げられ、朝食後に「天の国のたとえ」の福音から私たちの「宝物」と「福音」についての分かち合いをしました。お昼からは、庭に会場を移してバーベキューを楽しみました。

4月に札幌に引越してきた新メンバー、教区を超えて参加した青年、韓国、ベトナムなど多国籍の青年が一つに集まる温かい場が教会の中にあることは、日常生活においても信仰生活においても支えとなることだと感じました。少しでも興味のある方は、是非、次回の企画に参加してみてください。

最後に、青年たちのために惜しみない準備をしてくださった、佐久間力神父、千葉充神父、Sr松宮るみ子、本当にありがとうございました。

（マリアの宣教者フランシスコ修道会・Sr桑原）

ともに生きる

難民申請者、現る

日本の難民認定率がとても低いことを知っている方は多いと思う。では、もしも外国籍の方から難民申請をしたいと言われたら、あなたはどうするだろうか？「認定率は低いから、無理！」と断れるだろうか？あるいは、隣人として手を差し伸べるだろうか？

8月、いろいろなところに相談したけれど、先が見えず、困っているという電話をいただいた。電話の主は、札幌で外国人向けゲストハウスを営んでいる女性だった。6月に受け入れた宿泊者から難民申請をしたいと言われ、申請を手伝ったが、その後、2ヵ月を過ぎても何も進まず、「申請中」を理由とした在留資格の延長の許可が降りたばかりだった。ずっとゲストハウスに滞在し、所持金も無くなり、宿泊費どころか、食べるものを買うお金もない状態を支援していた。申請者は、ロシア国籍の男性。軍隊への入隊を求められ、ウクライナとの戦いに参戦したくないと、15日間の短期滞在許可と片道の航空券を持って、中国経由で新千歳空港から入国していた。新千歳空港では滞在先を問われただけである。

もし彼がウクライナからの避難民であれば、すぐに在留資格が与えられ、住宅が無償で提供され、生活のための支援費もおそらく2年を目途に支給されるだろう。

難民としての申請は、どこでもいつでもできる。問題は、いつ認定されるかわからないのに自分で自分の生活を守らなければならず、働くこともできず、国民健康保険の対象にもならないことである。もちろん生活保護の受給対象者にもならない。

唯一の望みをかけて、「生活困窮者自立支援制度」を扱う行政機関に相談をしてみたところ、外国人であることから、「外国人相談窓口」を紹介された。とっくに相談はしており、難民支援協会などにも連絡を入れた後である。生活困窮者自立支援法には国籍条項がないことから対応できないかと考えた結果だ。インバウンド（訪日外国人観光）に力を入れる街づくりの片隅で起きた出来事は、まだ答えが見えないままだ。

（札幌教区難民移住移動者委員会・西　千津）

初のミャンマー語ミサ

8月22日、カトリック北一条教会で札幌教区としては初めてのミャンマー語ミサが行われ、平日の午後にも関わらず、30人以上のミャンマー人が与った。司式をしたカトリック府中教会のヴィンセント神父は、日本に3人しかいないミャンマー人司祭の一人である。主任を務める府中教会の信徒向け黙想会が北海道で行われることが決まり、すぐに北海道のミャンマー人のためにミサを捧げたいという意向を示してくださった。その思いを実現するために府中教会の信徒が知り合いの函館元町教会の信徒に連絡を入れて下さったおかげで実現することができた。

ヴィンセント神父の講話と分かち合い、ゆるしの秘跡、ミャンマー語ミサ、交流会など、歌と踊りと笑顔にあふれた時間だった。言葉はわからないけれど、ミサの意向がたくさんあり、集まった青年たちがそれぞれ家族や友人の無事と平和を遠く離れた日本から祈り続けているとわかった。

後日、彼らの主導により彼らの地域を題材にした映画の上映もカトリックセンターで行われた。100名を超える人が集まり、多くがミャンマー人だった。映像の中で戦う人々と会場にいる彼らが重なって見え、紛争を身近に感じた。彼らは今日も平和を祈っている。

（難民移住移動者委員会・西　千津）

カトリックスカウトキャンポリー 2024 in 淡路島

8月10日～14日まで、全国のカトリック教会に所属し活動するボーイスカウト、ガールスカウトが兵庫県南あわじ市に集まりました。札幌教区からは北一条教会、羽幌教会のスカウトが参加しました。また、韓国、台湾、マカオ、アメリカのスカウトも参加し、総勢500名程のスカウトと指導者がさまざまなプログラムを共に行い、野営や舎営で過ごしました。

羽幌教会スカウト

北一条教会と羽幌教会のスカウト

全体プログラムでは、開会式、主日ミサ、交流会、交流プログラム、閉会式があり、その他にも場内や場外で行うプログラムがありました。毎朝ミサがあり、国や地域が違っても、同じ祈りを共に行うことができる体験は、カトリックスカウトの大会だからこそできることだと思います。参加したスカウトにとって初めての場所で、北海道では経験したことのない暑さを体験しましたが、全員が毎日祈り、食事を作り、元気に活動し、他県の団や海外スカウトとの交流を楽しんでいました。

この大会を通して、世界・日本全国に同じカトリック教会に所属するスカウトがいることを実感し、神様からのたくさんのお恵みを感じる機会となりました。これからも札幌教区でのスカウト活動を通じて、小さな宣教に繋がる活動になるように願っています。

（羽幌教会　小寺光一）

ミカエル祭

～生活の場からアジアへ世界へ 私達の国際協力～

9月29日、さわやかな秋空の下、羽幌教会では第51回ミカエル祭が行われた。羽幌町では有名な歴史ある町民参加型のバザー（本紙44号参照）で、今年も町内外から大勢が訪れ会場は大盛況だった。

「普段は少ないミサですが、椅子が足りないくらい聖堂がいっぱいになりました。天気も良く、ミカエル祭もたくさんの人が来てくれて楽しく過ごすことができました！もちろん、98%が未信者です（笑）たくさんのお恵みがあったと思います！」と、信徒の小寺光一さんは話す。収益の全てが国内外の諸団体の活動や災害支援に送られる。

小さな町の小さな教会だが、大きな力はいつも世界に向いている。

日本カトリック幼保連盟・北海道カトリック幼保連盟主催
第57回 園長教職員研修大会

7月27日(土)、藤女子大学(札幌)を会場に、標記研修会が開催された。北海道カトリック幼保連盟には58園が加盟しており、ハイブリッド形式(対面とオンライン)で、ほぼ全園より約400名の教職員が参加した。

勝谷司教挨拶、永年勤続者表彰に続き、澤田豊成師(聖パウロ会司祭)によるイエスのたとえ話を中心とした「聖書のメッセージ」、工藤ゆかり氏(北翔大学准教授)による「生き生き保育をめざして」の講演を聴いた。事例報告では、北見地区の各園の様子が紹介され、他地区の教職員に良いヒントとなった。

最後はチャペルへ移動し、伊達教会所属の齋藤真知亜・律子夫妻によるデュオ「nicoichi violin（にこいちヴァイオリン）」が奏でる美しい旋律に耳を傾け、祈りの時間を共にできたことが、カトリック園に勤務する教職員の励みになったと感じる。（品田典子）

北海道カトリック中高連盟主催
2024年度 教職員研修会

9月12(木)～13日(金)、旭川藤星高等学校を会場に、標記研修会が対面で開催された。現在、当連盟には8校(札幌聖心・札幌光星・海星・函館白百合・函館ラ・サール・藤女子・北見藤・旭川藤星)が加盟しており、全ての加盟校より参加者が旭川へ集まり、2日間の研修を共にした。

今回、山内保憲師(イエズス会)、レンゾ・デ・ルカ師(イエズス会)、佐久間力師(札幌教区)を講師としてお招きし、カトリック学校としてのアイデンティティー継承について、いま私たちが切支丹時代から学ぶこと、さらには社会とカトリック学校を繋ぐボランティア活動について学んだ。各講話後のグループ討議では、普段会う機会のない他校の教職員との話し合いが活発に行われた。

また、担当校である旭川藤星高校のミッションについて金子教諭からの報告もあり、夜は和やかな懇話会の時間を共有するなど、北海道内にあるカトリック学校に勤務する教職員が互いを知り、交流を深めるよい機会となった。

この連携協力の体制を今後につなげたい。（品田典子）

訃報

◆フランシスコ会

ドミニコ
バウアー神父

7月20日夜、月形藤の園にて神様のみもとに召されました。百歳。1957年より大町・名寄・砂川・末広・羽幌・神居教会などを歴任、幼稚園園長としても奉仕、長きに渡り札幌教区のために尽くされました。教区ニュース46号で叙階70周年を報じたばかりでした。

【略歴】
1923年12月19日生まれ
1948年4月15日着衣
1952年4月24日荘厳誓願宣立
1954年4月25日司祭叙階
2024年4月25日プラチナ祝

◆殉教者聖ゲオルギオのフランシスコ修道会

Sr.M.エレオノーレ
逢坂（おうさか） 保子（やすこ）

10月3日午後8時40分、月形藤の園にて神様のみもとに召されました。93歳。

【略歴】
1931年7月30日生まれ
1959年3月31日入会
1967年8月12日終生誓願
2021年11月3日ダイヤモンド祝

編集あとかたり後語

毎週北一条教会から円山教会まで歩いて通っている。幼稚園に向かうためだ。途中、道庁前を通り、植物園前を通り、知事公館前を通り、四季を感じながら歩く。時には花粉症に悩まされ、緑を避けたり、大好きなワンちゃんに出会うと後を追いかけたくなる衝動に駆られる。ロザリオを唱えようと思うのだが、見なければならないものもたくさんある。さて、ロザリオを唱えるべきか、周りを見渡すべきか。被造物を大切にしようと2019年から呼びかけていることを想うと、周りを見て「美しい」「素晴らしい」「神に感謝」と言えるならばそれも祈り。問題は意識するか？意識しないか？ではないか。（松村繁彦）